

付録 B 問題解答

- B.1 (1) $a + a = 1a + 1a = (1 + 1)a = 2a$.
 (2) $0a + 0a = (0 + 0)a = 0a$. 両辺に $-(0a)$ を加えると $0a = 0$.
 (3) $(1 + (-1))a = 1a + (-1)a$. ゆえに $0a = a + (-1)a$. (2) より $0a = 0$ なので $(-1)a = -a$.
 (4) $\lambda(0 + 0) = \lambda 0 + \lambda 0$. $0 + 0 = 0$ なので $\lambda 0 = \lambda 0 + \lambda 0$. 両辺に $-(\lambda 0)$ を加えて $0 = \lambda 0$.

B.2 ベクトル空間の公理 (P.177~178) の V を n 次実正方行列全体の集合, K を R とする. また, V の任意の元 a, b は任意の n 次実正方行列 A, B と読み替えればよい. n 次の零行列 O は, 任意の行列 A に対して $A + O = A$ となるので, ベクトル空間では零ベクトルである. すると以下のようにすべての公理が成り立つ.

- (i) $A + B = B + A$. (問題 1.5 (1))
 (ii) $(A + B) + C = A + (B + C)$. (問題 1.5 (2))
 (iii) $A + O = A$. (上記)
 (iv) $A + B = O$ となる B は $B = -A$ であり確かに V 中に存在する.
 (v) $(\lambda + \mu)A = \lambda A + \mu A$. (問題 1.5 (4))
 (vi) $\lambda(A + B) = \lambda A + \lambda B$. (問題 1.5 (5))
 (vii) $(\lambda\mu)A = \lambda(\mu A)$. (問題 1.5 (3))
 (viii) $1A = A$. (明らか)

B.3 P_n の任意の元を $a = a_0 + a_1x + \cdots + a_nx^n$ などと表す. 公理の (i), (ii) は明らか. また任意の a に対し $a + 0 = a$ なので 0 が零ベクトル 0 である. また, $a + b = 0$ となるような b は $b = -a_0 - a_1x - \cdots - a_nx^n$ であり, (iv) が成り立つ. (v)~(viii) は明らか.

B.4 W は V の部分集合なので, 公理の中で登場する等式の左右辺の演算結果が W に含まれることを確認すれば, 等式が成立すること自体は自明である. W が部分空間であるための 2 つの条件をもう一度記す.

- (ア) $a, b \in W$ ならば $a + b \in W$,
 (イ) $\lambda \in K, a \in W$ ならば $\lambda a \in W$.

以下, 公理 (i)~(viii) についてひとつずつ確かめる.

- (i) (ア) が成立するなら a, b の順序を変えた $b + a \in W$ も当然成り立つ.
 (ii) $a, b, c \in W$ ならば, (ア) よりまず $a + b \in W$ であり, さらに $(a + b) + c \in W$ となる. $a + (b + c) \in W$ も同様.
 (iii) (イ) について $\lambda = 0$ を選ぶと $0a \in W$ となる. $0a$ は V の元 0 に等しいので (問題 B.1 (2)), W の任意の元 a に対しても $a + 0 = a$ となる.
 (iv) (イ) について $\lambda = -1$ を選ぶと $(-1)a \in W$ となる. $(-1)a$ は V の元 $-a$ に等しいので (問題 B.1 (3)), $a \in W$ なら $-a \in W$ となる.
 (v) $\lambda, \mu \in K, a \in W$ なら (イ) より $\lambda a, \mu a \in W$ であり, (ア) より $\lambda a + \mu a \in W$. さらに $\lambda + \mu \in K$ なので $(\lambda + \mu)a \in W$.

(vi) $a, b \in W$ なら (ア) より $a + b \in W$. よって (イ) より $\lambda \in K$ なら $\lambda(a + b) \in W$. また (イ) より $\lambda a, \lambda b \in W$ なので (ア) より $\lambda a + \lambda b \in W$.

(vii) $\lambda, \mu \in K$ なら $\lambda\mu \in K$. よって $a \in W$ なら $(\lambda\mu)a \in W$. また (イ) より $\mu a \in W$ であり, さらに (イ) より $\lambda(\mu a) \in W$.

(viii) $1 \in K$ であるので $a \in W$ なら (イ) より $1a \in W$.

B.5 $\{0\}$ の任意の元は 0 しかない . また , $0 + 0 = 0, (0 + 0) + 0 = 0, (\lambda + \mu)0 = 0$ 等 , 公理に現れる等式の左右辺の演算結果は常に 0 となり等式が成立する . よって $\{0\}$ は部分空間である .

B.6 $P_1 \sim P_3$ が部分空間になることは明らか . P_0 すなわち定数だけの集合 $\{a_0; a_0 \in R\}$ も部分空間になる . さらにたとえば P_4 の元のうち x の 1 次の項がないもの , すなわち $a_0 + a_2x^2 + a_3x^3 + a_4x^4$ で表される元全体の集合も部分空間をなす . なぜなら , $0 = 0$ はこのうちに含まれており , 元同士の和やスカラー倍によっても 1 次の項が生まれえないからである .

B.7 (1) S の任意の元 a, b に対して $a + b \in S, \lambda a \in S$ であり , 零元 0 が 0 であることも容易にわかる . 公理のすべての条件が成立することは問題 B.3 の 1 変数の場合を参考にすればたやすいので省略する .

(2) $c_1(x^2 - 1) + c_2(x^2 + xy) + c_3(xy + 1) = 0$ とする . x, y の同じ次数の項でまとめ直すと

$$(c_1 + c_2)x^2 + (c_2 + c_3)xy + (-c_1 + c_3) = 0$$

となる . この等式が任意の x, y で成立するには , すべての係数が 0 , すなわち

$$c_1 + c_2 = 0, \quad c_2 + c_3 = 0, \quad -c_1 + c_3 = 0$$

が必要十分条件である . これより $c_1 = c_3 = -c_2$ が満たされればよいので , たとえば $(c_1, c_2, c_3) = (1, -1, 1)$ でもよい . ゆえに線形従属である .

B.8 (1) 等式 $c_1\mathbf{a}_1 + c_2\mathbf{a}_2 + \cdots + c_n\mathbf{a}_n = \mathbf{0}$ を考えると , 基底の定義よりこの場合でも $c_1 \sim c_n$ が一意に存在する . 明らかに $c_1 = c_2 = \cdots = c_n = 0$ はこの等式を満たし , 一意性より等式を満たすものはそれ以外に存在しない . よって $\mathbf{a}_1 \sim \mathbf{a}_n$ は線形独立である .

(2) 任意のベクトル α に対し

$$\alpha = c_1\mathbf{a}_1 + c_2\mathbf{a}_2 + \cdots + c_n\mathbf{a}_n \tag{1}$$

と表したとき , $c_1 \sim c_n$ が一意であることを示せばよい . 今 , 同じ α に対して

$$\alpha = c'_1\mathbf{a}_1 + c'_2\mathbf{a}_2 + \cdots + c'_n\mathbf{a}_n \tag{2}$$

というように別の線形結合で表せたとする . ところが ① - ② より

$$(c_1 - c'_1)\mathbf{a}_1 + (c_2 - c'_2)\mathbf{a}_2 + \cdots + (c_n - c'_n)\mathbf{a}_n = \mathbf{0}$$

となり , $\mathbf{a}_1 \sim \mathbf{a}_n$ が線形独立なので $c_1 = c'_1, c_2 = c'_2, \dots, c_n = c'_n$ しかありえない . よって $c_1 \sim c_n$ は任意のベクトル α に対して一意に定まる .

B.9 $p(x) \sim p'''(x)$ は以下で与えられる .

$$p(x) = 1 + x + x^2 + x^3, \quad p'(x) = 1 + 2x + 3x^2, \quad p''(x) = 2 + 6x, \quad p'''(x) = 6.$$

P_3 の任意の元を $a_0 + a_1x + a_2x^2 + a_3x^3$ と表すとき

$$\begin{aligned} a_0 + a_1x + a_2x^2 + a_3x^3 &= c_0p(x) + c_1p'(x) + c_2p''(x) + c_3p'''(x) \\ &= (c_0 + c_1 + 2c_2 + 6c_3) + (c_0 + 2c_1 + 6c_2)x + (c_0 + 3c_1)x^2 + c_0x^3 \end{aligned}$$

より

$$c_0 + c_1 + 2c_2 + 6c_3 = a_0, \quad c_0 + 2c_1 + 6c_2 = a_1, \quad c_0 + 3c_1 = a_2, \quad c_0 = a_3$$

が得られる . これを $c_0 \sim c_3$ について解くと

$$\begin{aligned} c_0 &= a_3, & c_1 &= (a_2 - a_3)/3, & c_2 &= (3a_1 - 2a_2 - a_3)/18, \\ c_3 &= (9a_0 - 3a_1 - a_2 - 5a_3)/54 \end{aligned}$$

となり , $a_0 \sim a_3$ から $c_0 \sim c_3$ が一意的に定まる . よって $p(x) \sim p'''(x)$ は P_3 の基底である .

B.10

$$\begin{aligned} a_1x^2 + a_2xy + a_3y^2 + b_1x + b_2y + c \\ = c_1(x^2 - xy) + c_2(xy - y^2) + c_3(y^2 - x) + c_4(x - y) + c_5(y - 1) + c_6 \end{aligned}$$

とおく . 両辺の同じべきの項を比較すると以下が得られる .

$$\begin{aligned} a_1 &= c_1, & a_2 &= c_2 - c_1, & a_3 &= c_3 - c_2, \\ b_1 &= c_4 - c_3, & b_2 &= c_5 - c_4, & c &= c_6 - c_5. \end{aligned}$$

これを $c_1 \sim c_6$ について解くと

$$\begin{aligned} c_1 &= a_1, & c_2 &= a_1 + a_2, & c_3 &= a_1 + a_2 + a_3, & c_4 &= a_1 + a_2 + a_3 + b_1, \\ c_5 &= a_1 + a_2 + a_3 + b_1 + b_2, & c_6 &= a_1 + a_2 + a_3 + b_1 + b_2 + c \end{aligned}$$

となり , a_i, b_i, c から $c_1 \sim c_6$ が一意に定まる . よって基底になる .

B.11 基底をなすベクトルの個数を数えればよい .

R^n の場合 : 第 i 成分が 1 で , それ以外の成分がすべて 0 のベクトルを $i = 1, 2, \dots, n$ に対して考える . 任意の元はこれらの線形結合で一意に表せるので , これらが基底をなす . したがって R^n の次元は n .

P_n の場合 : 任意の元は $1, x, x^2, \dots, x^n$ の線形結合で一意に表せるので , これらが基底をなす . したがって P_n の次元は $n + 1$.

B.12 線形写像 $f : V \rightarrow W$ に対し , 定義より $f(\lambda a) = \lambda f(a)$ が成り立つ . $\lambda = 0$ のとき $f(0a) = 0f(a)$. 問題 B.1 (2) より $0a = \mathbf{0} \in V, 0f(a) = \mathbf{0} \in W$. よって $f(\mathbf{0}) = \mathbf{0}$. また , $\lambda = -1$ のとき $f((-1)a) = (-1)f(a)$. 問題 B.1 (3) より $(-1)a = -a, (-1)f(a) = -f(a)$. よって $f(-a) = -f(a)$.

B.13 線形写像の定義より

$$f(\lambda_1 \mathbf{a}_1 + \lambda_2 \mathbf{a}_2 + \cdots + \lambda_r \mathbf{a}_r) = f(\lambda_1 \mathbf{a}_1) + f(\lambda_2 \mathbf{a}_2 + \cdots + \lambda_r \mathbf{a}_r) = \lambda_1 f(\mathbf{a}_1) + f(\lambda_2 \mathbf{a}_2 + \cdots + \lambda_r \mathbf{a}_r).$$

同様に

$$f(\lambda_2 \mathbf{a}_2 + \cdots + \lambda_r \mathbf{a}_r) = \lambda_2 f(\mathbf{a}_2) + f(\lambda_3 \mathbf{a}_3 + \cdots + \lambda_r \mathbf{a}_r).$$

以下同様に展開すると、与式が成り立つことがわかる。

B.14 P_n の任意の元は $\mathbf{a} = a_0 + a_1 x + \cdots + a_n x^n$ と表すことができる。 f によって写像すると

$$f(\mathbf{a}) = \frac{d\mathbf{a}}{dx} = a_1 + 2a_2 x + \cdots + na_n x^{n-1}$$

となり、 $f(\mathbf{a}) \in P_{n-1}$ となる。さらに、

$$f(\mathbf{a} + \mathbf{b}) = \frac{d(\mathbf{a} + \mathbf{b})}{dx} = \frac{d\mathbf{a}}{dx} + \frac{d\mathbf{b}}{dx} = f(\mathbf{a}) + f(\mathbf{b}),$$

$$f(\lambda \mathbf{a}) = \frac{d(\lambda \mathbf{a})}{dx} = \lambda \frac{d\mathbf{a}}{dx} = \lambda f(\mathbf{a})$$

が成り立つので、確かに f は P_n から P_{n-1} への線形写像である。

B.15 P.179 の部分空間の定義より、(i) $f(\mathbf{a}), f(\mathbf{b}) \in \text{Im } f$ ならば $f(\mathbf{a}) + f(\mathbf{b}) \in \text{Im } f$ 、(ii) $\lambda \in \mathbf{K}$ 、 $f(\mathbf{a}) \in \text{Im } f$ ならば $\lambda f(\mathbf{a}) \in \text{Im } f$ の 2 つが示されればよい。

(i) について： $\mathbf{a}, \mathbf{b} \in V$ より、 $\mathbf{a} + \mathbf{b} \in V$ となる。ゆえに $f(\mathbf{a} + \mathbf{b}) \in \text{Im } f$ 。さらに f は線形写像なので $f(\mathbf{a} + \mathbf{b}) = f(\mathbf{a}) + f(\mathbf{b})$ 。よって $f(\mathbf{a}) + f(\mathbf{b}) \in \text{Im } f$ 。

(ii) について： $\mathbf{a} \in V$ より $\lambda \mathbf{a} \in V$ となる。ゆえに $f(\lambda \mathbf{a}) \in \text{Im } f$ 。さらに f は線形写像なので $f(\lambda \mathbf{a}) = \lambda f(\mathbf{a})$ 。よって $\lambda f(\mathbf{a}) \in \text{Im } f$ 。

B.16 (1) $f(\mathbf{a}) = f(\mathbf{b})$ なら $f(\mathbf{b}) - f(\mathbf{a}) = f(\mathbf{b} - \mathbf{a}) = \mathbf{0}$ となる。そこで $f(\mathbf{x}) = \mathbf{0}$ を満たす \mathbf{x} を求める。

$$f(\mathbf{x}) = A\mathbf{x} = \begin{bmatrix} x + y \\ -x + z \\ y + z \end{bmatrix} = \mathbf{0}$$

より s を任意定数として $\mathbf{x} = s \begin{bmatrix} 1 \\ -1 \\ 1 \end{bmatrix}$ 。よって $\mathbf{b} - \mathbf{a} = \mathbf{x}$ となるような \mathbf{a}, \mathbf{b} を求めればよい。

たとえば $s = 1$ として、 $\mathbf{a} = \begin{bmatrix} 1 \\ 2 \\ 3 \end{bmatrix}$ 、 $\mathbf{b} = \begin{bmatrix} 2 \\ 1 \\ 4 \end{bmatrix}$ 。

(2) $f(\mathbf{x}) = \begin{bmatrix} x + y \\ -x + z \\ y + z \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} p \\ q \\ r \end{bmatrix}$ とおく。すると $p + q = r$ となるので $p + q \neq r$ ならばこの等

式を満たす x, y, z は存在しない。たとえば $\begin{bmatrix} 1 \\ 0 \\ 0 \end{bmatrix}$ は \mathbf{R}^3 に含まれるが $\text{Im } f$ には含まれない。したがって $\text{Im } f \neq \mathbf{R}^3$ 。

(3) 任意の x, y, z に対して $x + y = p, -x + z = q$ とすると

$$f(\mathbf{x}) = \begin{bmatrix} p \\ q \\ p+q \end{bmatrix} = p \underbrace{\begin{bmatrix} 1 \\ 0 \\ 1 \end{bmatrix}}_{\alpha} + q \underbrace{\begin{bmatrix} 0 \\ 1 \\ 1 \end{bmatrix}}_{\beta}$$

と表すことができる．これは α と β の線形結合であり， $f(\mathbf{x})$ が定まれば p, q は一意に定まる．したがって α, β が $\text{Im } f$ の基底であり， $\dim(\text{Im } f) = 2$ となる．

B.17 問題 B.7 の多項式に $y = 1$ を代入すると

$$a_1x^2 + (a_2 + b_1)x + (a_3 + b_2 + c)$$

となる．これは x の 2 次多項式である．さらに a_i, b_i, c を自由に与えて得られる多項式全体の集合は P_2 に等しい．従って問題 B.11 より $\dim(\text{Im } f) = 3$ である．

B.18 $f(\mathbf{a}) = \mathbf{0}, f(\mathbf{b}) = \mathbf{0}$ ならば， f は線形写像なので $f(\mathbf{a} + \mathbf{b}) = f(\mathbf{a}) + f(\mathbf{b}) = \mathbf{0}$ ．よって $\mathbf{a}, \mathbf{b} \in \text{Ker } f$ ならば $\mathbf{a} + \mathbf{b} \in \text{Ker } f$ ．また， $f(\mathbf{a}) = \mathbf{0}$ すなわち $\mathbf{a} \in \text{Ker } f$ ならば $f(\lambda\mathbf{a}) = \lambda f(\mathbf{a}) = \mathbf{0}$ なので $\lambda\mathbf{a} \in \text{Ker } f$ ．したがって $\text{Ker } f$ は部分空間の定義を満たす．

B.19 問題 B.14 :

$$\frac{d}{dx}(a_0 + a_1x + \cdots + a_nx^n) = a_1 + 2a_2x + \cdots + na_nx^{n-1} = 0$$

より $a_1 = a_2 = \cdots = a_n = 0$ ．したがって $\text{Ker } f = \{a_0; a_0 \text{ は任意の実数}\} = P_0$ ， $\dim(\text{Ker } f) = 1$ ．

問題 B.16 :

$f(\mathbf{x}) = 0$ を満たすのは $\mathbf{x} = s \begin{bmatrix} 1 \\ -1 \\ 1 \end{bmatrix}$ (問題 B.16 (1) 解答を参照)．したがって

$\text{Ker } f = \left\{ s \begin{bmatrix} 1 \\ -1 \\ 1 \end{bmatrix}; s \text{ は任意の実数} \right\}$ ． $\begin{bmatrix} 1 \\ -1 \\ 1 \end{bmatrix}$ が $\text{Ker } f$ の基底になるので $\dim(\text{Ker } f) = 1$ ．

問題 B.17 :

$y = 1$ を代入して得られる多項式は

$$a_1x^2 + (a_2 + b_1)x + (a_3 + b_2 + c).$$

この多項式が x によらず 0 となるのは

$$a_1 = a_2 + b_1 = a_3 + b_2 + c = 0,$$

すなわち

$$a_1 = 0, \quad b_1 = -a_2, \quad c = -a_3 - b_2.$$

これを S の元に代入すると $a_2(xy - x) + a_3(y^2 - 1) + b_2(y - 1)$ ．ゆえに

$$\text{Ker } f = \{a_2(xy - x) + a_3(y^2 - 1) + b_2(y - 1); a_2, a_3, b_2 \text{ は任意の実数}\}.$$

明らかに $xy - x, y^2 - 1, y - 1$ が $\text{Ker } f$ の基底になるので $\dim(\text{Ker } f) = 3$ ．

B.20 問題 B.14 :

$V = P_n$, $\dim V = n + 1$. $\text{Im } f = P_{n-1}$ なので $\dim(\text{Im } f) = n$ であり, 問題 B.19 より $\dim(\text{Ker } f) = 1$. よって定理 B.2 が成立する.

問題 B.16 :

$V = \mathbf{R}^3$, $\dim V = 3$. 問題 B.16 (3) より $\dim(\text{Im } f) = 2$ であり, 問題 B.19 より $\dim(\text{Ker } f) = 1$. よって定理 B.2 が成立する.

問題 B.17 :

$V = S$, $\dim V = 6$. 問題 B.17 より $\dim(\text{Im } f) = 3$ であり, 問題 B.19 より $\dim(\text{Ker } f) = 3$. よって定理 B.2 が成立する.

B.21 $V = \mathbf{R}^4$, $\dim V = 4$. \mathbf{R}^4 の任意の元 $x = \begin{bmatrix} x \\ y \\ z \\ u \end{bmatrix}$ を f で写像する.

$$f(x) = \begin{bmatrix} 1 & 2 & 0 & 1 \\ -1 & -2 & 0 & -1 \\ 2 & 4 & 0 & 2 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} x \\ y \\ z \\ u \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} x + 2y + u \\ -(x + 2y + u) \\ 2(x + 2y + u) \end{bmatrix} = (x + 2y + u) \begin{bmatrix} 1 \\ -1 \\ 2 \end{bmatrix}.$$

よって

$$\text{Im } f = \left\{ t \begin{bmatrix} 1 \\ -1 \\ 2 \end{bmatrix}; t \text{ は任意の実数} \right\}$$

であり, $\dim(\text{Im } f) = 1$.

一方, $f(x) = \mathbf{0}$ とおくと上式より $x + 2y + u = 0$ となる. したがって $f(x) = \mathbf{0}$ を満たす x

の一般形は $\begin{bmatrix} r \\ s \\ t \\ -r - 2s \end{bmatrix}$. ゆえに

$$\text{Ker } f = \left\{ r \begin{bmatrix} 1 \\ 0 \\ 0 \\ -1 \end{bmatrix} + s \begin{bmatrix} 0 \\ 1 \\ 0 \\ -2 \end{bmatrix} + t \begin{bmatrix} 0 \\ 0 \\ 1 \\ 0 \end{bmatrix}; r, s, t \text{ は任意の実数} \right\}$$

であり, $\dim(\text{Ker } f) = 3$. ゆえに $\dim V = \dim(\text{Im } f) + \dim(\text{Ker } f) = 4$.

B.22 $V = P_n$, $\dim V = n + 1$.

• $k \leq n$ のとき :

$a_0 + a_1x + \cdots + a_nx^n \in P_n$ に対して

$$\begin{aligned} f(x) &= \frac{d^k}{dx^k}(a_0 + a_1x + \cdots + a_nx^n) \\ &= k!a_k + (k+1)!a_{k+1}x + \cdots + n(n-1)\cdots(n-k+1)a_nx^{n-k}. \end{aligned}$$

よって $\dim(\text{Im } f) = n - k + 1$. $f(\mathbf{x}) = 0$ とおくと $a_k = a_{k+1} = \cdots = a_n = 0$. ゆえに

$$\text{Ker } f = \{a_0 + a_1x + \cdots + a_{k-1}x^{k-1}; a_0 \sim a_{k-1} \text{ は任意の実数} \}.$$

ゆえに $\dim(\text{Ker } f) = k$. よって定理 B.2 が成り立つ .

- $k > n$ のとき :

$f(\mathbf{x}) = 0$. $\text{Im } f = \{0\}$ なので $\dim(\text{Im } f) = 0$. また $\text{Ker } f = V = P_n$ より $\dim(\text{Ker } f) = n + 1$. よって定理 B.2 が成り立つ .